

文献案内－「統合失調症」と「超越論的統覚」をめぐる

片桐茂博

On “Schizophrenia” and “Transzendente Apperzeption”
(an introduction of the literature)

Shigehiro KATAGIRI

Keyword: 統合失調症 (schizophrenia)、超越論的統覚 (transzendente Apperzeption)、夢 (dream)

Summary: We can find both some philosophical literature and books written by some psychiatrists suggesting that there should be a close relationship between the psychiatric concept of “Schizophrenia” and the famous concept in Kant’s *Kritik der reinen Vernunft* of “Transzendente Apperzeption”. And the analysis of dreams in different terms from those by psychoanalysis will help us to understand the problematique involved.

カントの『純粋理性批判』における中心概念「超越論的統覚」について、一般教養の「哲学」の授業で説明することの困難は並大抵ではないはずである。もちろんそのような概念を無意味と断ずる向きは「哲学諸派」の中にもあるだろうが、少なくとも評者はその有意義性を確信している。そのような状況で、むしろカントの趣旨に悖る危険性もあるとはいえ、いわば搦め手の戦術として精神病理学の知見を援用するという方法が考えられるのではないか。そもそもまず、心理学というよりも精神病理学の知見にカント的問題状況を確認するという哲学サイドからの試みが、山本信『形而上学の可能性』（東京大学出版会、1977）（ビンスヴァンガー、ミンコフスキー、フォーコーに言及したものとして坂部恵『理性の不安』（勁草書房、1976）を初めとして夙に存在し、これに対して精神病理学のほうからも木村敏を初めとする「応答」あるいは「発信」がある（山本前掲書などを引用するというかたちでの直接的な「応答」という意味では必ずしもない）。たとえば、木村敏『異常の構造』（講談社現代新書、1979）は、現在でいう「統合失調症」に罹患した人の「体験」への接近というほとんど不可能に近い試みの、「一般向け」の紹介としてはほとんど嚆矢と言えるのではないだろうか。その後も同氏は陸続と関連論文・著書を発表されているが、たとえば『偶然性の精神病理』（岩波書店、1994）は、その「永遠回帰」説の解釈を初めとして、内沼幸雄『対人恐怖の人間学』（弘文堂、1977）の「ツァラトゥストラ」解釈とともにニーチェ理解に資する好個の書と言える。もちろんいわゆ

る作家の「病跡」研究の意義と問題性に関しては議論もあるだろうが、先行通説のニーチェ像を一新する「反転図形」現出の一助にはなるはずである。さらに近年では、渡辺哲夫『知覚の呪縛』（西田書店、1986、後に「ちくま学芸文庫」、2002）と同『死と狂気』（筑摩書房、1991、後に「ちくま学芸文庫」、2002）がやはり「精神分裂病者」（前掲二書の表現による）とのぎりぎりの「交流」の、表現の限界に迫る、あるいはその臨界点を彷徨する、その意味ではもはや「学術論文」というよりも、一個の「文学作品」とも言えそうな存在となっている。前者は、故大森荘蔵からの影響を自認しているが、いわゆる大森哲学の無条件の礼賛に終わっているわけではなく、むしろ「立ち現われ」という概念の問題性を示唆していると思われる。そこに描かれるというよりは提示されている状況は、おそらくカント的「統覚」が「失調」しているそれに他なるまいが、それが「わかる」と読む側に言わせることを阻む何かがある。「一般教養」の哲学とはいえ、ソクラテス以来の伝統、すなわち「無知の知」（「無知」ではなく「不知」であるという納富信留「ソクラテスの不知—「無知の知」を退けて—」（『思想』2003年4月号、岩波書店）の説得力ある議論もあるが、一応「通説」に従う）がここでもまた残された方途となるかもしれない。すなわち、「超越論的統覚」の「失調」を理解不能と自覚することを通じてのみ「統覚」概念の意義に接近することが可能となるということである。それでもなお、「文献案内」ということで、あえて図式的に表現すれば、『異常の構造』や『死と狂気』が描く世界では、自分とモノ、自己と外界の境界に異常が生じ、各々においてその存立を支える「秩序」の分節が崩壊している。またその「失調」が対人関係における何らかの「歪み」を契機として生起しているようであり、いみじくも「人間」の「本質」は「社会的諸関係の総体」であるというマルクスのテーゼを逆照射しているかの如くである。さらに少なくとも『死と狂気』において示唆されていると思われることだが、宗教成立の基盤となる「人間」の「超越性」、「聖なるもの」とのいわば垂直的な関係性が「失調」という事態において際立っているかのようである。しかし、それにしても「統合失調症」からの、あるいはそこへの道のりは、「われわれ」の日常生活からはあまりに程遠いというのであれば、もっと「穏健」な戦術もある。これもまた既に山本前掲書が論じていることであり、デカルト、ベルクソンなどの先駆的「業績」もあるのだが、「夢」と「現実」の差異に注目するという方法である。これは精神分析でいう「夢分析」そのもののことではなく、とりあえず「夢」の認識論的、存在論的な意義付けのことである。カントを批判しながら「超越論的統覚」にほとんど関説することのないベルクソンが「夢」の成立基盤であるわれわれの「存在自体」が「限定」されて「知覚世界」が成立すると説くとき、ベルクソンはカントとは異なった方向から同じ事態をみつめている、と言えるのではないか。（なお、渡辺氏はその著書『二十世紀精神病理学史序説』（西田書店、2001）において、精神病理学者としてのヤスパースに対して精神現象の歴史性の没却を論難されているが、フーコー、ドゥルーズ、デリダなどいわゆる「ポスト構造主義」の「思想家」

たちとの類縁性が窺われて興味深い。その点では、浅田彰の「発明」した「スキゾ」と「パラノ」という対概念とは別途、精神医学の観点から同様の対概念に注目した、木村敏や中井久夫（たとえば『分裂病と人類』（東大出版会 UP 選書，1982）の業績も忘れることができない。）（文中敬称略）